

・活用し、英語ノートは、レシビ的なものとして活用する。教師自らがカリキュラムを作るぐらいの
気構えていたいと訴えられた。

3「教員研修」の分析・問題点・提言

最後に、小学校外国語活動に必要な教師研修について話をされた。研修内容には、理論研修・授業
研修・英語研修の3つがあるが、理論と実践を組み合わせていかなないとなかなか授業は上達してい
かない。また、現状では教師の研修を担当する講師がそもそも教師教育の十分な訓練を受けておらず、
研修の成果を生かすことは受講者に任されてしまう。

そこで ①講師向けの講習の設置・コーディネーターの設置 ②理論・実践・省察の一体型研修と
いうことを提案されて、講演を終えられた。(以上 文責 中田)

事務局だより

事務局長 奈須正裕

学習指導要領も高校まで出揃い、新教育課程下における個性化教育のいっそうの充実に向けて、み
なさんの意気も上がっていることと思います。えっ、そんなことないって。だって肝心の総合的な学
習の時数が減ったじゃないかって。

たしかに、前回に比べれば減りました。でも、さらに遡って前々回と比べればどうでしょう。平成
元年には総合は存在しないので時数は当然ゼロ。それと比べれば小学校で 70 時数も増えている。ふ
ざけているわけじゃありません。すっかり真面目に、長い目で見れば増えたと考えています。むしろ、
長い目で見れば減ったのは音楽、図工、家庭です。前回に比べれば減ってはいませんが、元年以前は 70
でしたから前回は大幅減、それが今回も放置されています。

もっとも、前回は5日制の実施と総合の創設を受けて、生活科を除くすべての教科が「痛み分け」、
ほぼ同比率で減りました。ところが、算数は今回ちゃっかりと元年以前の水準に戻っていますし、国
語、社会、理科、体育もいい線まで戻してきました。つまり、10 年ではなく元年以前と比べてみる
と、今回の時数は、算数は変化なし、国語、社会、理科、体育は微減、音楽、図工、家庭は大幅減な
んですね。

物事は近視眼的に見てはいけません。教育は国家百年の計ですから、いよいよ長い目で見ないとい
けない。すると、私には総合的な学習がいかに重視され、優遇されているかがありありと見えてくる
んですが、みなさんはいかがでしょうか。

前置きがすっかり長くなりましたが、事務局からのご案内を3点ほど申し上げます。

- 1) 第2回全国大会(高知大会): 8月8日(土)、9日(日)に高知市で開催されます。詳しくは同
封の2次案内をご覧ください。ちなみに、高知市では翌10日からよさこい祭りが開催されます。是
非、観光を兼ねてお出かけ下さい。また、よさこい祭りの関係で交通機関、宿泊施設は混み合うこ
とが予想されます。同封の資料のように、今回は学会として宿泊の斡旋もしています。早めのご準
備をお願いいたします。
- 2) 免許更新講習: 高知大会のプログラムは神戸国際大学が本学会と連携して行う免許更新講習(B
講習)の一部として利用できます。その場合、7日から高知市で実施される講習に参加し、9日も
学会終了後の午後の講習に参加する必要があります。詳しくは神戸国際大学(Tel. 078-845-3500
kyoushoku@kobe-kiu.ac.jp 担当: 亀高)まで。なお、締切りが5月15日と迫っていますので、ご希望
の方は急ぎ手続きをお願いします。
- 3) 学会誌「個性化教育研究」: 浅沼委員長の下で第1号の編集作業が着々と進んでいます。ちなみ
に、今回は当初の予想を超える二桁の論文投稿がありました。引き続き第2号に向けても、活発な
実践・研究の展開と論文の投稿を期待しています。

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
庶務部長 佐久間 茂和
〒114-0003 東京都北区豊島 8-27
フレシェル王子神谷 2-914
tel03-3912-2797
e-mail sakuma.s@s7.dion.ne.jp
日本個性化教育学会ホームページ
http://zenkoren.com/

日本個性化教育学会 第7号
平成21年5月9日発行

編集責任者 事務局長 奈須 正裕
編集 広報部 中田 泰志

日本個性化教育学会

日本個性化教育学会会報

第7号

発行
平成21年5月9日
発行責任者
加藤 幸次

中国(経済特区シンセン市)の学校を見学して

会長 加藤幸次(上智大学名誉教授)

今日、中国のシンセン市から帰ってきました。シンセン市日本人学校の校長、三浦信宏先生は古く
からの会員で、幕張メッセにある打瀬、海浜打瀬小学校の実践を作り出してきた先生です。1週間も
お世話になり、2人で現地の4つの小学校と1つの国際学校を見学しました。

シンセン市は20年前人口3万人の港町でしたが、今は1,200万人の大都市です。すべては新しく、
「北京市の出店」のような都市です。語文(国語で、普通語=共通語、北京語といってもいいのです
が)の授業は、週当たり1年生9時間、2年生8時間、3年生7時間、4~6年生6時間、英語はす
べての学年で5時間です。総合実践(総合的学習)もあり、すべての学年で週1時間です。日本と違
って、学級担任は語文の授業を担当し、原則あとの科目は専科の教師が教えます(台湾も、香港も、
教科担任制)。1人の教師の担当時間は大体週14~15時間で、うらやましい限りです。学級規模は40
人~45人です。学校規模は1学年5学級、全校30学級、1,200人程度です。教師数は70人程度です。
訪問した現地の4つの小学校はすべて同じ規模でしたから、この規模は教育部(文科省)が現在考え
ている標準的なものと思われます。

主に、1、2年生の語文の授業を見学しましたが、とても、きびきびした張りつめた感じの授業で
した。まず、題材の文章を群読する、あるいは、教師が読むのに従って、子どもたちが斉唱する。教
師の声がとても大きい。つぎに、新出漢字の説明と読み方の指導をする。このときも声がとても大き
い。教師は常に「話づめ」といった感じです。子どももまた常に「話づめ」といった感じです。教室
には「声」が充満している感じです。なんと、1学期に学ぶ漢字、約450字、うち、約350字は書け
なければいけない、という。2年間で約2,000字というわけです。1、2年の教師には若く、優秀な
先生を当てるとのことでした。学校は漢字文化の維持、普通語の全国的な普及、それに英語の導入と
いう国家的使命を担っていて、強い緊張感がみなぎっている感じです。宿題も多く、親の責任も重大
で、子どもたちの「落ちこぼれ」が心配にもなりました。

いい勉強になりました。一体、経済成長著しい中国のこうした授業のあり方をどう捉えるべきか、
考えさせられる1週間でした。

春季研究会 小学校外国語活動の可能性を探る

~「英語ノート」だけで本当にいいのか~

いよいよ、新学習指導要領の移行期間に入ろうとする3月28日(土)に表記のテーマで春季研究
会が行われました。英語教授法に関する最新の研究成果の報告や、実践的なプログラムの体験など、
バラエティに富んだ研究会になりました。

- 1 期日 2009年3月28日(土)
- 2 会場 上智大学8号館209号室
- 3 日程・内容
9:30~受付
10:00~10:10 開会行事
10:10~11:00 基調提案 上智大学名誉教授 加藤幸次
11:20~11:50 調査報告1 「イマージョンプログラム導入の可能性と課題」
上智大学大学院 伊藤静香
11:50~12:20 調査報告2 「異文化理解教育と英語教育の統合を目指して」
日本学術振興会特別研究員 石井英里子

13:20～13:50 英語教育活動に関わるアクティビティ
 13:50～14:50 講演「英語教授理論からの考察と提言」
 上智大学文学部英文学科准教授 池田真
 15:00～16:00 全体討論「小学校外国語活動の可能性を探る」
 司会 加藤幸次

基調提案 上智大学名誉教授 加藤幸次

各学校や教科書会社で作られた英語ノートや、愛知の生路小学校をはじめとして 600 校以上が文科省の指定を受けたこと、英語特区として 1 年生から週に 3 時間英語の授業を行っている学校もある現状を話されて、講演を始められた。主な骨子は「言語政策をめぐって」と「小学校の英語活動をめぐって」の二つに大別される。

1 言語政策をめぐって

加藤先生によると、日本の小学校英語のあり方は定まっていないという。外国語活動を 5・6 年生に週 1 時間入れるという時数レベルでの取り組みが進んできたということや、教育改革国民会議の議題として英語について取り上げられたときに、「モノリンガル」（日本語オンリー主義）の意見が強く出されたという。また、外国語を学習することで、それに付随する文化に日本が飲み込まれてしまうのではないかと危惧されたという。モノリンガル・モノカルチャーの動きで教育界が引っ張られてきたと話された。プランは進んだが、それに裏打ちする行財政改革が進んでいないとも話された。

英語教育の目的・カリキュラムという点では、相山女学園大学での免許更新講習で、中学や高校での英語の専門性とは？ということを変えて考えたと話された。カリキュラムの一貫性としての問題を明らかにしないといけないと、強く感じられたということである。

2 小学校の英語計画をめぐって

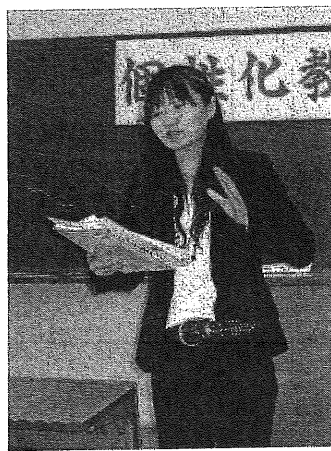
平成 23 年度完全実施の外国語活動では、目標に「コミュニケーション能力の素地を養う」とある。加藤先生は、この中の「素地」に着目された。素地とはいったい何か？楽しんで取り組めるような英語のアプローチとは何か？ちょっとした会話ができると言うこととくつつかないわけではない。歌やゲームを通して楽しさを知るだけのものは、アメリカの英語教育にはあるのだろうか？と疑問を投げかけられた。

英語を巡る課題としては、特に貧困な言語環境を挙げられた。普段英語で会話していない我々は、言語環境の違いをどうするかということを考えるべきだと話された。

最後に指導法に関して、クラスルーム・イングリッシュ（学級管理に必要な英語のこと）や学級担任が教える小学校英語の学習活動（英語で総合学習・英語で算数…という発想。）についても話され、これからは、もっと具体的に生きる内容の英語をやろうという動きがあることを話題にされて締めくくられた。

調査報告 1 「イマージョン・プログラム導入の可能性と課題」

上智大学大学院 伊藤静香



イマージョン・プログラムという耳慣れない言葉に興味を持って伊藤先生の報告をお聞きした。小学校における外国語教育は、目的と全教育課程に占める授業時数の割合で、イマージョン・フレズ・フレックスの 3 つに大別出来るということである（日本の小学校英語教育はフレックスである）。

イマージョン・プログラムとはバイリンガル教育の一形態であり、社会的背景を反映した言語政策だという。多民族国家であるアメリカで少数派言語を話す子ども達に教育の機会均等や文化的アイデンティティの肯定を目的として取り組まれてきたという。アメリカではスペイン語とのイマージョンが多い。日本のイマージョン・スクールの歴史としては、1992 年の加藤学園が始まりだが、最近ではぐんま国際アカデミー等の取り組みが知られている。

ぐんま国際アカデミーのビデオを見ながら、詳しい紹介がなされた。ここでは、授業の 7 割以上が英語で、教科書は検定教科書の翻訳や教科書会社との共同開発、アメリカの教科書等を使用しているそうである。



授業は英語による活動が中心だという。最後にイマージョン・プログラムについては、否定的な意見が多い。しかし、まだまだ今後とも研究の余地があるプログラムではあるとまとめられた。

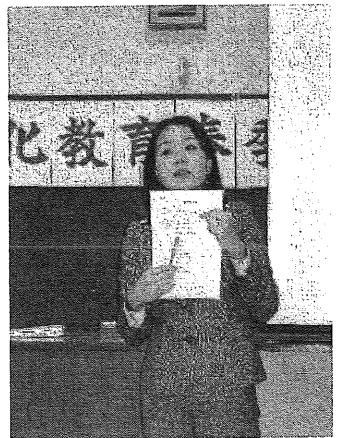
調査報告 2 「異文化理解教育と英語教育の統合を目指して」 日本学術振興会特別研究員 石井英里子

国際化社会における英語の役割が異なる言語や文化背景も持った人とのコミュニケーション・ツールになってきているということから、石井先生はこの研究を始められたそうである。

言語学習の動機付けの研究では、例えば英語を資格取得や就職のための手段として習得する道具的動機付けよりも、文化を理解したいなど社会の一員として組み込まれたいという統合的動機付けの方が、学習結果がよいそうである。

言語学習が異文化理解の態度にどのような影響を与えるかという研究関心から、教室内活動で有効なものはないかということで、異文化教育＋言語教育という形態を取ったところ、もともと異文化理解・言語学習に対して消極的だった生徒において改善が認められる結果が得られたということである。

最後に、外国語活動での異文化理解教育の導入ということで、小学校英語教育における意味を文化の違いや共通点に興味を持つこととされて、報告を終えられた。



英語活動に関わるアクティビティ

伊藤静香 石井英里子

低学年向け・中学年向けとしていくつかのアクティビティを紹介された。アクティビティのいくつかは、ネットでフリーでダウンロードできるサイトがあり、そこを活用することができる（<http://www.bogglesworld.com>）。また、active and response（体を動かして覚える）ということが非常に効果的であるとも話された。

その後、アクティビティとして、5・6 年生向きの活動を参加者全員で体験した。これは、いろいろな図形の英語での名前を覚えて、2 人組みの片方が英語で指示するとおりにもう片方が図形を描いていくというものである。場所を表す inside、outside、top、bottom、right、left を使って説明していくのだが、なかなか難しく楽しく取り組めた。

英語教授理論からの考察と提言

上智大学文学部英文学科准教授 池田真



池田先生は、学習指導要領に掲げられている外国語活動の目標の分析から講演を始められた。

1 「目標」の分析・問題・提言

日本の学習指導要領は玉虫色であり、外国語活動の目標にある「素地」とは？と、問題を投げかけて話を始められた。

池田先生によると、理想的な英語の授業モデルとして、文化・心理・言語の 3 つがバランスよく合わさっているモデルが考えられるという。しかし実際には、どれかに偏っているとして、文化・心理・言語が中心のモデルを示された。また、小学校英語の授業を考えたときに「ものさし」があるのではないかと、授業の位置づけを考えるための「ものさし」を提案された。

また、問題点ということで、小学校外国語活動の目標のパラドックスというお話をされた。小学校で楽しく英語を学ぶほど、中学校へ行ってから、座学中心で、さらに知識を問う試験を伴う中学校英語学習に失望するという。一つの打開策として、日本の場合はインプットが

少ないので、大量の英語のインプット（たくさん読む・聞く）が必要である。そうすると、「知ってる」「わかる」という体験が増えて、動機付けが高まるのでは、と話された。

2 「英語ノート」の分析・問題点・提言

「英語ノート」自体は、よくできてはいる。しかし、素材や活動にリアルさが無く、おもしろくないので、平均的な授業しかできない。英語ノート自体は一定の教育内容の質と量を保証しているが、没个性的であり、教師はそれに踊らされてしまう、と指摘された。したがって、リアルな教材を準備